初動期回想分析を用いたまちづくりＮＰＯにおける共感的組織形成要因の把握*

Study on Non Profit Organization Groups Formed by Emotional Factors Using Reminiscence Analysis*

野田昭子**
By Akiko NODA**

１．はじめに

近年、わが国においても、市民活動団体やＮＰＯ（Non Profit Organization：民間非営利組織）がまちづくりにおける方向性や合意形成の鍵を握るなど、その原動力となりつつある。こうした組織が社会的な役割を担う上で、グループとしての人格ともいうべきスタイルを有し、それが人々の共感や信頼をもたらすことが重要と思われる。しかし、その形成過程や意識構造は未だ解明するには至っていない。そこで、本研究では、結成15年目を迎える徳島市のあるまちづくりＮＰＯのコアメンバーに対し初動期回想調査を用いることにより、共感的組織において不可欠と思われるグループとしてのスタイルの形成要因を把握すべく分析を行った。

２．本研究の方法

（１）回想理論について

本研究では、アドラー心理学の早期回想理論[1)]を用いて調査を行った。早期回想理論とは、「膨大な経験の中から適応する上で有益な情報のみを覚えるように記憶は選択されている」、「その人の現状を理解するために用いられるものであり、現在の行動と早期回想を相互に関係づけることができる」、「回想には傾向、偏りがあり、そこからその人の理想と目標を推論することができる」というものである。

また、アドラー心理学によると、人はそれぞれ「動きの独特の法則」＝「ライフ・スタイル」を持つ。また、別の言葉に言い換えると「ライフ・スタイル」とは、その個人の中に存在するあらゆるルールを１つのパターンに組織化したものである。そのライフ・スタイル診断に、早期回想は家族布置とともに用いられる。個人に行う早期回想からは、自己像・世界観・主要目標・活動方法といったライフ・スタイル要素が引き出せるものとされている。この理論をもとにすると、本研究はあるグループに対し初動期の回想をまとめて分析することにより、グループとしてのスタイルを導き出すことを試みるものといえる。

３．対象ＮＰＯ法人「新町川を守る会」について

（１）会の概要

本研究の対象となるＮＰＯ法人新町川を守る会（以下、新町川を守る会と略す）は現理事長である中村英雄氏の「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう」という呼び掛けにより、平成２年に有志10人で発足した。

「ボランティア精神を基本として地域住民に対し、河川環境の向上とまちづくりに関する事業を展開し、地域社会に寄与する」（定款より抜粋）ことを目的とする本会は、初期の頃からの会としての独自のスタイルを保ちつつも次々と新規事業に乗り出し成功を収めていること、また会員数も着実に増加し280名を抱える大規模な組織に成長していることなどから、現在では、環境・まちづくりＮＰＯとして、徳島県内のみならず全国的にも高い評価を得ている団体である。

今年で15年目を迎える本会の時代区分について、

---

*キーワーズ：まちづくり、ＮＰＯ、リーダーシップ、回想分析

**学生員、工修、徳島大学大学院工学研究科情報システム工学専攻
（徳島市南常三島町２丁目１、
TEL088-656-7578、FAX088-656-7579）

本研究では、「３．（２）会の発展過程」に示すように会の活動内容の変遷等を踏まえて、以下の５期に区切り整理した。

（２）会の発展過程

a）「初動期」（平成２年～平成４年）

会を結成した平成２年３月から、毎月２回、新町川に浮かぶゴミをボートから網ですくうという原始的な方法で清掃活動を始め、続いて同年５月には、新町川上流の田宮川堤防の緑化活動を開始した。これらの地道な活動が認められ、活動開始から２年経った平成４年６月には日本河川協会から表彰を受け、続く７月には環境庁より水環境賞を受賞するなど、マスコミ等からも注目されるようになる。

また、平成４年にはクリスマス時期の３日間にわたり、繰り広げられるイベント「川からサンタがやってくる」も新町川を守る会主催で開始された。これは会員がサンタクロースに扮して船に乗り、川から子どもたちに約3,000個のプレゼントを手渡すというユニークなイベントで、現在では地域住民に非常に人気の高い会の活動の一つとなっている。

b）「成長期」（平成５年～平成７年）

平成４年７月に徳島市が市のＰＲ船として「ひょうたん号」を就航し、第２・第４日曜にひょうたん島周遊船として運航を開始したが、乗船客数なども振るわず低迷を続けていた。そこで、周遊開始１年後の平成５年７月に徳島市は新町川を守る会にその運営を委託した。当時の市の担当課で係長を務め、新町川を守る会の会員で今回の調査対象者でもあるＦ氏（表１参照）は、「中村氏が『自分たちが無料でやって成功してみせる』と明言した」と当時を振り返る。そして、平成７年には14人乗りの船「クイーンリバー号」を会が購入し、周遊船として運航を開始した。

c）「発展期」（平成８年～平成10年）

平成８年には、吉野川河川敷を会場に毎年８月初旬の３日間にわたり行われる大規模イベント「吉野川フェスティバル」の新町川を守る会による運営が始まった。それまでの過去５年間は、徳島市及び青年会議所などでつくられた協議会の主催で実施されていたが、次第に下火になっていった。そこで、活動を始めて７年目になる新町川を守る会に白羽の矢が立てられ、「吉野川フェスティバル実行委員会」として運営にあたることになった。

d）「法人化後」（平成11年～平成13年）

「特定非営利活動促進法」（ＮＰＯ法）が、平成10年12月に施行されたことを受けて、それまで数々の活動実績をもつ新町川を守る会はいち早く名乗りを挙げ、平成11年７月に法人格を取得した。

また、ひょうたん島の周遊について、会が市から運営を引き受けた当初は土日・祝日のみの運航であったが、平成12年からは平日も含め毎日５回の周遊を開始し、県内外からの乗船客は年間３万人以上にものぼり好評を博している。

e）「近年」（平成14年以降）

平成15年８月には吉野川フェスティバルと同時開催で、新町川を守る会を実行委員会として、「川に学ぶ体験活動全国大会in徳島」が２日間にわたって行われた。これは、岡山、北九州に続き第３回目の全国大会で、川に関係する活動団体、約300人が徳島に集結し活動発表や意見交換会などを開催した。このように会は公的にも信頼される存在となっている。

（３）調査の方法

調査は2003年10月～2004年２月にかけて、表－１に示す計９人に実施した。現在、会の中で中心的役割を担っている人や、継続的に会の活動に寄与している人など、会の役職等にこだわらず、実質的に現在の会の運営に影響力を持っていると思われる人物を選定した。なお、リーダーについては別途独自のヒアリング調査は実施したが、本研究がリーダー及びこの会を支えた会員の意識構造を明らかにすることを目的とするため、分析対象としては除外した。

表－１　調査対象者の入会時期及び属性等

会員	入会時期	年代	性別	会の役職
Ａ氏	平成2年3月（会設立時）	60代	女性	監事
Ｂ氏	平成2年5月	70代	男性	監事
Ｃ氏	平成2年6月	40代	女性	副理事長
Ｄ氏	平成2年夏	50代	男性	副理事長
Ｅ氏	平成3年	50代	男性	－
Ｆ氏	平成5年	50代	男性	前監事
Ｇ氏	平成5年	70代	男性	理事
Ｈ氏	平成10年	40代	女性	前理事
Ｉ氏	平成11年	50代	男性	－

ヒアリングに要した時間は40分から２時間で、一人当たり平均１時間10分程度である。

調査は、まず入会のきっかけについて尋ねた後、「あなたが会の活動を始めてから、できるだけ昔のことで、その情景や場面をありありと思い出せるような、ある日あるところで起こった１回きりの出来事についてお話してください」という質問形式で実施した。エピソードが浮かばない場合には、時期を区切ったり具体的な活動を挙げたりして、回想を促すよう努めた。そして、最後に必ず「他に浮かぶエピソードはないですか」と問いかけ、その人が持つエピソードがおおよそ出尽くしたことを確認して終了した。

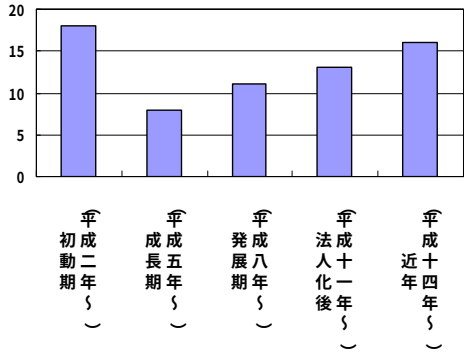
また、それぞれのエピソードについて、「それはどこで起こった出来事ですか」、「その時、周りには誰がいましたか」、「その時、あなたはどんな気持ちでしたか」、「そのエピソードの中で最も印象的な場面は？」の問いかけを行った。

４．回想の分類方法

（１）エピソードの分類方法とエピソード数

回想については、語り手が一連の話として語ったものであっても、その内容が複数のエピソードを含んでいる場合には分割し、それぞれを独立した一つのエピソードとして扱った。

出てきたエピソード数は、最も多い人で13、最も少ない人で３、合計68で、一人当たり平均7.5であった。これら全てのエピソードを「３．（２）会の発展過程」のa）からe）の５期により分類を行ったものが図－１である。初動期が最も多く、全体の26％を占める。



図－１　時期によるエピソードの分類

（２）情景からみたエピソードの分類

情景については、回想の中で多く含まれていた特徴的な事柄、「リーダーの言動」、「メンバーの言動」、「話し合い・会合」、「言い合い」、「飲み会」、「川掃除・花壇の手入れ」、「吉野川フェスティバル」、「イベント」の８つを設定して分析を行った。

（３）トピックからみたエピソードの分類

既往研究で早期回想に共通してみられるトピックスとして挙げられている22項目について本回想を当てはめた結果、「驚き」、「協力関係」、「地位」、「倫理性」、「障害」、「新しい状況」の６つが該当した。表－２にこの６つの用語の定義を、また表－３にそれぞれのトピックの例を本調査で得られたエピソードを用いて示す。

表－２　トピックの主な定義

トピック	主な定義
驚き	予期せぬできごとの発生。
障害	自分のやり方（進路）が、障害あるいは他者の行為によって邪魔されている早期回想。
協力関係	他者との楽しい結びつきの早期回想、あるいは自己と他者との隔たりの早期回想。
地位	他者からいかに重要だと見られるか、グループ内でどのようにして重要になれるのかの問題。
倫理性	正・不正、公平・不公平、善・悪の問題。
新しい状況	学校の最初の日とか、引っ越してきた最初の日は、この問題の原型的な回想である。

表－３　トピックを含むエピソードの例

トピック	エピソードの例
驚き	ある日曜の朝6時頃、田宮運動公園沿いを車で走っていると、守る会が整備している田宮川堤防の花壇で白くて動くものが見えたので、近寄ってみると、白いカッターシャツを着た中村さんが一人で一生懸命草刈りをしていた。その日は小雨が降っていて、しかも2月か3月頃の寒い時期だった。
障害	土曜日の１時からということで、１時ちょっと前に新町川のボートハウスの前の集合場所に行ったら、もう清掃する船は出発していて、船からの掃除はできなかった。ちょっとぐらい時間を待ってくれればいいのにと思った。
協力関係	野外草月展の期間中、周遊船の船頭をしている中村さんが、わざわざたもと公園で船をとめて、「新町川を守る会の会員で、生け花の先生であるAさんが・・・」と自分のことを出してガイドしてくれていた。自分はたもと公園からその光景を見ていて、すごく嬉しかった。
地位	（花壇の手入れをする際、Ｂ氏が必ず皆に缶ジュースを差し入れしていることを受けて） 総会の時だったと思うが、中村さんが挨拶の時に「Bさんには本当に頭が下がります。私一人でひょっとすると2000本ぐらい飲んでいます。」と言った。
倫理性	しかし、せっかく掃除に来たのに、このまま家に帰るのも何かと思い、ちょうど干潮時だったので、新町川水際公園の前の捨て石の上を歩いて河川内のゴミを拾った。

新しい状況	ある日、そこのテーブルで話をしている時、中村さんから「川を網でゴミ拾いする」という話を持ち掛けられた。最初その話を聞いた時は、正直「えっ、そんな幼稚な方法でやるの？大丈夫？」という感じだった。

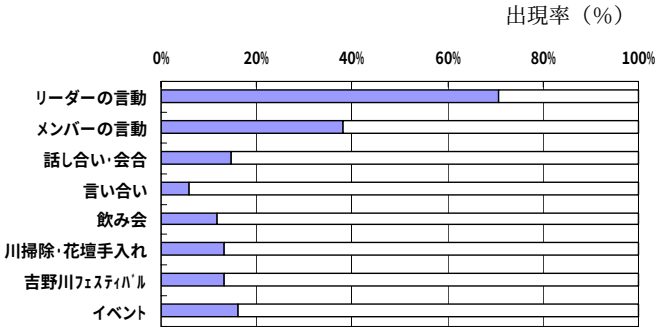
５．回想分析

（１）回想分析の方法

会の発展を支えた会員の意識構造を探るため、それぞれの回想について、活動の場面及びシーンを表現している「情景」と、それを心理的側面からアプローチする「トピック」という２つの側面からの分析を試みた。

（２）情景からみたエピソードの分析

「４．（２）情景からみたエピソードの分類」に挙げた８つの情景について、それぞれのエピソードに現れるものをカウントし、それを総回想数における出現率として表したものを図－２に示す。出現率は「リーダーの言動」に突出がみられ70％に達する。次いで「メンバーの言動」が約40％となっている。これに対し、「飲み会」、「川掃除・花壇の手入れ」、「吉野川フェスティバル」、「イベント」の出現率については、それぞれ10～15％の範囲にとどまっている。活動の場面、場所に関するものよりも、活動に際しての会員間のやりとりが多く回想されていることが分かる。

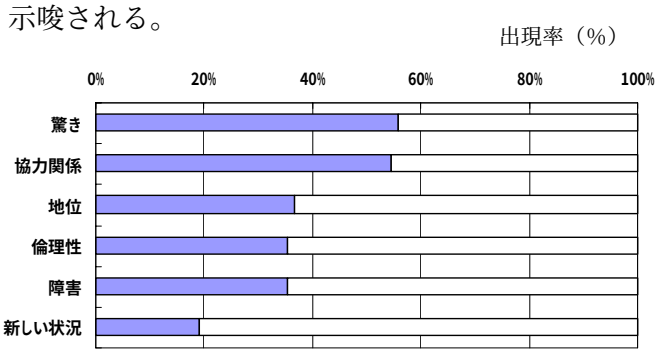


図－２　回想における情景の出現率

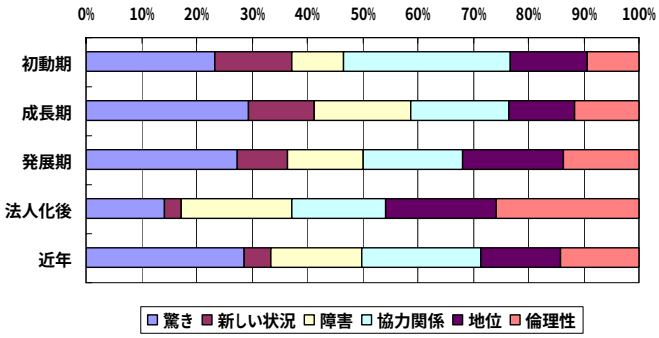
（３）トピックからみたエピソードの分析

「４．（３）トピックからみたエピソードの分類」に挙げた６つのトピックについて、それぞれのエピソードに現れるトピックをカウントし、それを総回想数における出現率として表したものが図－３である。「驚き」、「協力関係」の出現率が高く、55％を占める。次いで、「地位」、「倫理性」、「障害」が35％程度となっている。

次に、これらのトピックについて出現構成比を「３．（２）会の発展過程」の時期ごとに分類し、その変化を表したものが図－４である。「法人化後」に「驚き」と「新しい状況」が激減し、「地位」と「倫理性」が急増しており、大きな変化が見受けられる。しかし近年、また「法人化後」以前の出現構成比に戻りつつあることが分かる。共感的な組織を形成した初動期において「驚き」と「新しい状況」の出来事が要因の一つとして存在することが示唆される。



図－３　回想におけるトピックの出現率



図－４　時期ごとにみたトピックの出現構成比

６．結論と今後の課題

本研究では、あるＮＰＯグループのコアメンバーに初動期回想を用いることによって、「情景」と「トピック」という異なる二側面から組織の形成要因を把握することができた。ここから、更に発展させ「自己像・世界観・主要目標・活動方法」といった会の持つグループ・スタイルとしての要素の分析を試みることが今後の課題といえる。

参考文献

１）バーナード シャルマン、ハロルド モサック、前田憲一訳：「ライフ・スタイル診断」2000